

ヴィクトリア社会における女性の職業支援の「論理」

— 初期フェミニズム誌 English Woman's Journal にみる言説から —

柴原 真知子

はじめに

本論は、19世紀半ばイギリスで展開された女性解放運動における女性の職業支援活動に注目し、その活動展開の拠り所となった一連の言説を、女性の職業支援の「論理」という視点から抽出・検討することを通して、支援活動の特質を明らかにすることを目的とする。具体的な考察対象は、1858年に創刊された English Woman's Journal 誌¹⁾(以下、EWJ 誌とする)である。EWJ 誌は、ロンドンを拠点とした中産階級女性による活動から生み出された初期フェミニズム誌の一つ²⁾であり、「女性雇用促進協会 (Society for Promoting Employment for Women)」(1859年創設)の組織化に貢献するなど、女性解放の取り組みが個人的な活動から継続的・組織的運動へと発展するに段階において、一定の役割を果たしたと考えられる。

産業革命以降、階級分化が著しく進んだイギリス社会では、労働／職業が細分化・複雑化し、さまざまな領域で、独自の専門性や技術的卓越性をもった熟練の労働者や職業人、事業経営者などが現れた³⁾。職業的成功を取めた男性の多くは、「強烈な地位の志向性、すなわち、ジェントルマンになりたいという強い欲求を持つようになった」⁴⁾と指摘されるように、旧来の支配階級である「ジェントリ」層の生活様式や文化を体現することを希求した。そこで「ジェントルマン」と表裏一体の存在であった「レディ」もしくは「ジェントルウーマン」は、家庭内外で決して労働に従事することのない「家庭の天使」像を体現することを強く期待されたのである。

しかし、「ジェントルマン」的生活を志向した中産階級といえども、経済的変動の激しい社会では常に没落の危機に晒されたのであって、少なからぬ女性は期待される女性像に反して自活を求めざるを得なかった。これらの女性は、当時、ほぼ唯一の女性の職業であった「ガヴァネス (家庭教師)」に自活の可能性を求めたとされる。しかし、「ガヴァネス」職では、職業的専門性よりも「母親代わりとしてのアマチュアであること」、「有給雇用ではないこと (雇用契約は結ばない)」などが建前とされ、「働いているという事実そのものが、彼女たちの地位を危ういものにしていった」⁵⁾と指摘されるように、ガヴァネスらは経済的困窮及び社会的周縁性に直面したのである。

(没落)中産階級女性が直面したこのような深刻な生活状況を根拠として、イギリス女性解放は、「職業」を軸として生み出されたと理解することができる。ヴィクトリア期における女性と「職業」をめぐる取り組みは、イギリス女性解放思想及び運動を捉える上で鍵となると考えられるが、これまで「職業支援」の視点から分析しようとした先行研究は、管見の限り極めて少ない。例えば、R・ストレイチャーは、女性運動家の EWJ 誌や女性雇用促進協会への関わ

りを取り上げたが、これらを運動の本格的始動の契機として位置づけるにとどまった⁶⁾。また、河村貞枝はEWJ誌の継続後誌として位置づけられる Englishwoman's Review誌を手がかりに、イギリスフェミニズムの特徴と当該時期を生きた女性の姿を明らかにしたが、EWJ誌に描きだされているのはフェミニズムがその形を明確に現し始める「前史」であるとの見解を示すにとどまっている⁷⁾。

これらの先行研究の到達点と課題を踏まえて、筆者はこれまで、ロンドンを拠点に展開された初期女性解放運動で機関誌の役割を果たしたEWJ誌に注目し、同誌に掲載された報告記事等から女性の職業支援の実践的取り組みについて明らかにしてきた⁸⁾。1859年に設立された「女性雇用促進協会」は雇用創出事業や学習機会創出事業の必要性に注目し、同誌を出版した印刷所での女性の雇用・育成や、地方の女性も模倣し得るモデル事業としての法律事務オフィスの開設・運営、簿記などの成人クラスの実施、女性会館（レディース・インスティテュート）の設立などに取り組んだ。これらの取り組みから、同協会は、女性が職業を持つことを擁護・支援し、情報拠点及び人の交流拠点としての役割を担うことで、成人女性のための新たな学習機会を提供しようとした点を指摘することができる。

しかし、EWJ誌の雑誌としての性格は、実践報告よりも言説形成に重点が置かれた点にあり、また同誌が発刊されたのは、女性運動の本格的展開の「前夜」とも言える時期であった。このことから、実践的取り組みのみを対象とすることでは、同誌から垣間見ることのできる女性の職業支援活動の特質を捉えたことにはならないといえる。当時の状況下で「女性の職業支援」実践に着手するには、何よりもまず、「女性が職業を持って生きること」の根拠とそれを支援・援助する根拠を説得的に提示する必要があるはずである。そこでは、(没落)中産階級女性の生活現実に顕著に表れた矛盾を理論的武器とすることで、自活を求める女性が置かれた被抑圧的を暴き、積極的な働きかけの余地を押し広げるという作業が求められたのではないだろうか。このような仮説に立つことで、ヴィクトリア社会で展開された女性の職業支援の特質を明らかにすることができると思う。

このような問題意識から、日本の社会運動でも用いられてきた「論理」⁹⁾という視点にたつて、同誌の言説がもっていた諸要素と構造を明らかにしたい。この作業を通して、「職業」と切り離されることなく開拓された、女性のための新しい学習及び学習援助の在り方を浮き彫りにすることが可能となると考える。さらに、従来、上層労働者階級男性を主体とした学習・教育活動から非職業的教養主義的成人教育を描き出してきた従来のイギリス成人教育史研究が直面してきた限界性¹⁰⁾をも乗り越える知見を導き出しうる筆者は考える。

以下本論では、まずEWJ誌を初期女性解放運動の「女性と職業」への取り組みとして位置づけ、その上で同誌の編集方針と同誌の女性と職業をめぐる議論の全体像を「論理」として抽出・整理し、それぞれの「論理」についての分析・考察を進める。

1. 初期女性解放運動における「女性と職業」への取り組み

「女性と職業」は、イギリス女性解放思想の萌芽的提起以来、ヴィクトリア期の女性運動の組織的展開に至るまで主軸であり続けたテーマであったといえる。女性解放思想を初めて体系

的に提起した M・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) は、『女性の権利の擁護』(1792 年) において、自らの (没落) 中産階級女性としての経験や苦悩を反映させながら、政治的・経済的諸権利、教育、結婚、社会的偏見など様々なテーマを、女性の職業的自立を核として論じた。

ウルストンクラフトの提起から約半世紀後に、没落中産階級女性の生活課題は社会問題としての注目を集めた。1851 年の国勢調査では、女性人口が男性人口を上回っていることが統計的に明らかにされ、これらの女性は「家庭の天使」としての役割を果たすことのできない「余った女性」と表現された。ここでカテゴライズされたのは、特に「決して生活のために働いたりすることのない『淑女』、そして将来は『淑女らしき妻や母』」¹¹⁾と期待された中産階級女性であった。これらの女性は、期待された理想像に反して自活を求めるという矛盾を抱えていたがゆえに、その生き方はパンチ誌などの大衆誌や絵画、小説などで頻繁に描かれた¹²⁾。

EWJ 誌の母体となったのは、このような (没落) 中産階級女性の問題に関心をもった上層中産階級女性であった。同誌創刊者であるバーバラ・L・S・ボディション (Barbara L. S. Bodichon) とベッシー・R・パークス (Bessie R. Parkes) もまた、裕福な中産階級家庭の出身であり、かの女らを中心としてロンドンに「ランガム・ブレース・グループ」と呼ばれる女性運動活動団体が形成された¹³⁾。このグループは「ヴィクトリア時代後半のほとんど全ての女性運動が、ここから成長したといっても過言ではない」¹⁴⁾と評価されるように、イギリス女性運動の源泉となった。

ここで中心的存在であったボディションは、1855 年に「既婚女性財産法案」提出のための委員会を設立し、既婚女性の私有財産はすべて配偶者である夫に帰属する当時の法律制度に反対して平等な私有財産制度の実現のための活動に取り組んだ。同法案はこの段階では実現されなかったものの、26,000 以上もの署名を集めた大規模な運動となった。同時に、「賛同した人々は他の多くの点についても同意見であることがわかって、仲間の輪が広がり」¹⁵⁾、「特に女性の教育と雇用の領域」¹⁶⁾を共通の関心として、より組織的な活動の必要性が認識されるようになったとされる。

この経験からボディションは、労働・職業の問題こそが、女性の経済的・政治的諸権利の実現にあたって取り組まれるべき問題であるとの認識を強めたと考えられる。EWJ 誌創刊の前年には、論文『女性と労働 (Women and Work)』を出版し、そこでガヴァネス職のみが女性の職業として認識されていた当時、時計職人や、会計士、看護師、事務員、講師などでも女性が働くことは可能であり、社会的需要もあるとの主張を展開した。これは、ボディションの関心が法的権利の問題から労働問題へと移行したことを示すものであり、同誌の議論の基調ともなった。

このような経緯から EWJ 誌が創刊されると、翌年には実践的組織として「女性雇用促進協会」が創設された。同協会は、創設後すぐに進歩的中産階級男性による組織「全国社会科学振興協会 (National Association for Promoting Social Sciences)」¹⁷⁾に加盟し、男性をも女性雇用の議論に巻き込みながら、(没落) 中産階級女性の職業支援実践に着手した。また、1864 年に終刊した EWJ 誌は、女性雇用促進協会創設者の J・ブシェレット (Jessie Boucherett) が代表編集者となって、Englishwoman's Review 誌へと引き継がれ、全国の様々な女性運動の実践について約 40 年間にわたって報告され続けた。

2. EWJ 誌にみる女性の職業支援の「論理」

(1) EWJ 誌の編集方針 — 「理論 (theory)」から「論理」への再構築

EWJ 誌は、1858 年から 1864 年まで発行された月刊誌であり、発行部数はひと月 1000 ～ 2000 部程度であったとされる¹⁸⁾。各号はたいいてい、論考で始まり、講演記録、詩・小説、活動報告、組織紹介、書評、読者投稿欄、国内外の出来事欄という構成であった。「論考」だけでも取り上げられたテーマは、法律、政治、経済、雇用・職業、教育、移民など多様であったが、特に「雇用・職業」は中核的であった。同誌創刊号の巻頭論考は、「教師という職業：ガヴァネス慈善協会年次報告 1843～1856 年」（1858 年 3 月）¹⁹⁾であり、そこでは当時、女性の職業としてかろうじて許容された「ガヴァネス」の生活実態から、女子教育改革や職業領域拡大の必要性が論じられた。

同誌の運営組織や編集方針は明示されておらず、また多くの記事は無署名・匿名投稿であった。それゆえ、編集方針を把握することは難しいが、例えば創刊年の論考「女性が職業生活を送ることについて」（1858 年 9 月）では、同誌の目的とは「職業的キャリアをもちたいと望んでいる女性が向かい合う主な障害は何かを考え、それらを女性が克服していくのを支援する (help) もっともよい方法を考えること」²⁰⁾であるとされ、その具体的手順について以下のように述べられた。

我々の義務は、EWJ 誌が議論することのできるあらゆる問題について、完全な合理性を持って議論することではない。我々のような雑誌が存在するのは、まさに時代の兆候である。我々は単に持論 (theories) を示しているのではなく、社会で行われている物事について、我々や読者の方々の目に映る範囲で観察し、報告し、議論しているのである。我々の役割とは、見たものを解釈し、曖昧で形がないようなものを体系立てて示すことである。そして、女性であること、さらに女性であることを通して人間性を獲得することに関心をもつ男性と女性の集結点を創ることである。社会的善悪の根本的問題は、女性が職業を持って人生を送ることに関わって存在しているのである。²¹⁾

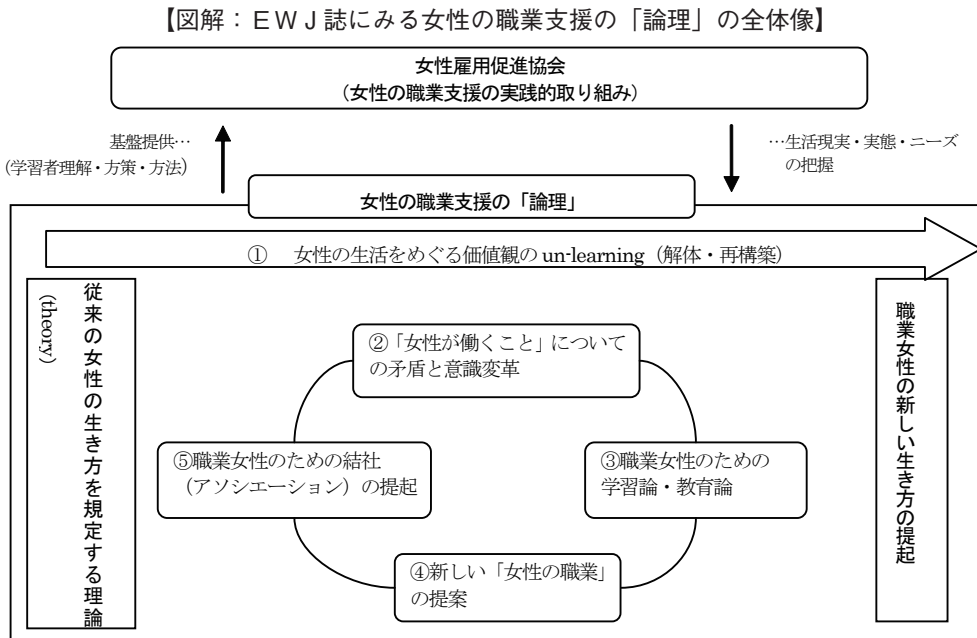
同論考は無署名であるとはいえ、「我々のような雑誌」という表現からも示唆されるように、同誌編集の中心人物によるものと考えられる。また、別のパークスの論考には、女性雇用促進協会には自活を求める女性から月 100 通にも及ぶ手紙が届けられたとの記録があり、これらの声に基づくがゆえに、「女性雇用の問題をあたかも個人的事情などないかのような論文形式では議論できない」²²⁾とされた。この記述からも、上記の編集方針はある程度共有されていたといえる。

また、同誌の編集方針を示す鍵概念に「理論 (theory)」がある。これは、複数の論考で様々に用いられたが、性差別を含む既存の政治経済論や知性論、女性のしかるべき生き方を規定する通念や社会規範を包括する言葉とみることができる²³⁾。同誌の論調とは、男性を前提としたこれらの「理論」は、多くの女性が自活を余儀なくされているという現実を前にしては、既に妥当性を失っているのであり、「偏見を脇において、これまで保持されてきた理論を検討しな

ければならなくなった²⁴⁾というものである。また、パークスによると、従来の「男性に関する理論は今後も解体され続ける」のであり、「女性について、抽象から議論することがどれだけ不毛なものとなるか」と問わざるを得ない段階にあるとされた²⁵⁾。このように同誌では、執筆者・編集者である女性運動家自身が見聞きした女性の生活課題を根拠に、従来の「理論」を打ち崩しながら、職業を持った女性の生き方を擁護・支援しえる言説の構築が試みられたと考えることができる。

(2) 女性の職業支援の「論理」の全体像

以上の編集方針から発行されたEWJ誌では、様々なテーマが時系列的・内容別に体系立てられないままに論じられたが、女性の職業支援の「論理」という視点からは、いくつかの特徴的な要素を抽出することができる。それらは、次に示されるように図式的に整理することができる。



その要素とは、①女性の生活をめぐる価値観の un-learning（解体・再構築）、②「女性が働くこと」についての矛盾と意識変革、③職業女性のための学習論・教育論、④新しい「女性の職業」の提案、⑤職業女性のための結社の提起である。①は、同誌の女性と職業というテーマを貫徹する「論理」である。「働くことのない家庭の天使」としての女性を規定してきた通念や学問的正当性を纏った議論など（＝「理論」）を、女性の生活現実に照らし合わせて解体・再構築（＝ un-learning）することで、職業をもって前向きに力強く生きることのできる新たな価値観の構築を目指そうとするものである。②から⑤に示される「論理」は、①の考え方の下に組み立てられたものであり、人びとの意識、教育、職種、組織論など女性の職業的自立の

障碍となっている諸要素について、批判的に検討しながら、新たなオルタナティブを提起しようとするものである。

このように整理できる女性の職業支援の「論理」は、さらに、女性雇用促進協会の実践的取り組みに対して、支援対象となる女性をいかに理解し、どのような方策と方法をとるべきかについての手がかりを提供していた。逆に、同誌は、協会の実践報告を通して、女性の生活現実や実態、ニーズを把握し、それらを同誌の編集・執筆に反映させていたとみることができる。

(3) 女性の職業支援の「論理」

① 女性の生活をめぐる価値観の un-learning (解体・再構築) —ジェンティリティからの脱却

EWJ 誌における女性と職業の議論の根幹は、「ジェンティリティ (gentility)」という人びとに広く内面化されてきた価値観を un-learning (解体・再構築) することによって、女性が職業をもって生きることを擁護・支援しえる価値を新たに構築しようとするものであったと考えられる。「ジェンティリティ」とは、一般的に、豊かさをさまざまな「道具立て」を用いて誇示しようとした新興階級である中産階級の暮らしぶりに象徴される価値観であり、その具体的表象は、家具や調度品、使用人、馬車、長期休暇、教育などにまで及んだ。そこでは、家庭内で有閑に過す女性の存在自体が、「ジェンティリティ」の重要な構成要素の一つとなっていた。

同誌では、パークスが『『ジェンティリティ』は階級分化の激しいイギリスに顕著』にみられることを指摘し、それは「いつでも勇気をもって働くことができる機会が身近にあるときに、そうすることを思いとどまらせる」「誤った観念」²⁶⁾であるとした。同様の指摘は他の論考でも繰り返しなされ、「ジェンティリティ」が中産階級女性だけでなく、これらの女性の親、さらには労働者階級女性にも内面化されていたことが指摘された。

まず、中産階級女性自身に内面化された「ジェンティリティ」については、論考「女性を必要とする労働について」(1858年5月)で論じられた。これらの女性は、「ジェンティールで洗練された生活だと思ふ貴族生活をまねすることに飽き足らず、雇用がとても無駄なものという考えを内面化し、女性の使命である家事労働をも嫌がる。かの女らには、一生懸命働く親への蔑視や低く見る意識が見え隠れする」²⁷⁾と述べられた。

さらに、このような意識をもった女性の自己形成には娘の階級上昇を願う親の期待が影響していた。労働者階級や下層中産階級の出身である「これらの女性の親たちは、実直でよく働く人たちが、健全な家庭の影響から切り離すような浮ついた寄宿学校に娘を送ることで十分に『教育 (edication)』(教育とはいえ「まやかし」にすぎない当時の女子教育を批判してここでは意図的に「誤字」が用いられている…引用者)を与えたと思ひ込み、ジェンティリティが将来、不幸やみじめさを生むなど夢にも思っていない」²⁸⁾とされた。ガヴァネスの問題は当時、広く認識されていたが、「ジェンティリティ」にはかろうじて反しないがゆえに、「親たちは娘たちに財産を与えるだけの手段をもたず、娘たちをガヴァネスにしようとやっきになる」²⁹⁾状況にあった。

加えて、この「ジェンティリティ」は労働者階級女性にも内面化されたことで、女性の職業的自立の問題をより複雑なものにしていた。「ジェンティリティ」を体現する中産階級女性の存在は、豊かさの象徴であり、「他の国では見られないほどあくなき階級上昇を志向する」³⁰⁾イ

ギリス社会では、この価値規範に労働への蔑視が含まれていようとも、労働者階級女性にとっての憧れとなった。同誌では、多くの労働者階級女性が従事した「家事使用人」について論じ、これらの女性は、「レディ像を身近に持ち、雇用者である女性の身なりや労働への蔑視などをまねる。そして、家事使用人は、やわらかくて白い手や、『ジェンティール』に見えることに憧れを抱く」³¹⁾と指摘された。

中産階級女性、その親、さらには労働者階級女性への影響からも示唆されるように、「ジェンティリティ」は、女性の理想的な生き方や自己実現の方向性にまで影響を与えた価値観であった。しかし、現実には多くの女性は親の事業の失敗などから自活の必要に迫ら、その手段としてガヴァネス職を選び、結果として、供給過剰状態と経済的困窮が引き起こされたのである。論考「教師という職業」(1858年3月)ではこのようなガヴァネスの実際について次のように述べられた。

専門職男性のもとに生まれた娘は、型にはまった知識とたしなみを身につけ、突然の親の死や投資の失敗のために「教職」に急いで就く。まじめに十分に取り組みばできるかもしれないあらゆる可能性を投げ出しまで教職に就くのであるが、教えるにあたっての技能・教養、専門的な能力、科学はきちんと獲得されてきたわけではない。³²⁾

さらに、論考「ガヴァネス問題」(1859年11月)では、「ガヴァネスは、恐れを抱きながら一年一年を見送る。35歳か36歳でお払い箱となり、貧困を経験するにはまだ若すぎるが、新しい職を身につけるには高齢すぎるという問題」³³⁾に直面し、また「家事使用人は、自分たちの居場所(hall)をもち社会的楽しみもある。ガヴァネスは、孤独で、あわれみの笑いにも心を痛めながら耳に入れなければならない」³⁴⁾といった孤立感に悩まされるという現実が明らかにされた。

では、このような「袋小路」状態ともいえる生活現実の中で、女性が職業的自立を獲得するには何が必要なのか。同誌ではこの問いに応える考え方として、“un-learning”が用いられた。この言葉は、同誌では何度か用いられた。以下はその一例である。

将来、このような女性は、パンの焼き方、醸造法、チーズの製法、家政を学ぶであろう。自分の生活がかかっているのだから、これらを学び、実際にできるようにしなければならぬ。しかし、最初に、彼女らの頭をいっぱいにしてきた考え、すなわち、「そのような労働は自分たちの誇りを減じさせ、待ち望んでいたジェンティリティを失わせるものではないか」、といったばかげた考えを un-learning しなければならない。³⁵⁾

ここから示唆される un-learning とは、成育過程を通して「ジェンティリティ」を内面化した女性が、従来の認識枠組みや価値規範をいったん解体して、自らの生活課題に照らし合わせながら、再構築することを意味している。同誌は、このような un-learning が、女性の職業的自立を実現するにあたっての鍵と位置づけていたと考えられる。

② 「女性が働くこと」についての矛盾と意識変革

EWJ誌において「女性が働くこと」とは、経済現象ではなく、社会を構成する人びとの意識と密接に関連するものとして理解された。同誌によると社会とは「命のない機械の集合体ではなく、それぞれの思考と感情を通して行動する、生きた男女の共同体」であり、そのような中で「間違いは少しずつ生まれ、知覚できぬほどに段階的に、ゆっくりと、社会に一定の慣習や習慣を生みだす」³⁶⁾ものと理解された。ゆえに、人びとが内面化してきた「女性が働くこと」についての意識変革こそが、女性の職業的自立を展望する上で重要であるとされた。

例えば、論考「現実対理想」(1861年4月)では、「家庭的(domestic)」「領域(spheres)」「働くこと(work)」など日常的な「言葉」の意味が再検討された。そこは、第一に「働くこと」の主語が男性か女性かによって、それが全く逆の意味をもつという矛盾が指摘された。当時、「近代の労働観」ともいうべき労働を肯定的に捉える価値観が特に中産階級・上層労働者階級男性の間で支持されていたが、女性の場合は同じ中産階級であったとしても、逆の意味に変質したのである。

一般的に、女性に関しては働くこと(work)は地位を低めるものであるとみなされる。それゆえ、workは、女性が「教育」(とは全く言えないものであるが)を受けた後、肯定的な意味づけのされた有閑さに彼女らを留めておくために使われる言葉となる。このような偏見があることで女性は、心に痛みを抱えながら食いぶちを稼がなければならなくなる。³⁷⁾

第二に、「家庭的」「領域」という言葉は女性に独自の徳性を付与しながらも、「家庭」外でそれを発揮することを認めないという矛盾を含むことが指摘された。先行研究でも指摘されるように「信仰と道徳の源として家庭を神聖化」³⁸⁾する福音主義に基づく「家庭の天使」像は、「家庭」=「女性の領域」とみなし、信仰心や道徳性といった特権的な徳性を女性に与えた。しかし、「家庭的」という言葉は、「十分には定義されず、軽率に構築された」³⁹⁾ものでしかなく、中産階級女性にとっては、家事労働すら放棄し、「仕事をせずに役の立たない存在となり、無知で居続け、怠惰であることを促す」言葉として機能していたのである。それゆえに、女性に付与された独特の徳性を社会で活かそうと「家庭の領域を出ると軽蔑と嘲笑の対象」⁴⁰⁾となるのが実際であった。

③ 職業女性のための学習論・教育論

学習論・教育論は、EWJ誌において最もよく論じられたテーマである。基本的論調は、男性の(一般の)教育・学習を手がかりとして、従来の女子教育の批判的検討と新しいあり方の提起をしようとするものである。男性を学習者として前提にし、職業的成功と結び付いて論じられた当時の一般的な学習論についての洞察から、職業女性の学習論を展開しようとした点に特徴がある。

この議論における鍵概念は、使用頻度からみても「habits(個人の意志や態度、自己認識など)」であるといえる⁴¹⁾。明確な定義はなされていないものの、例えば論考「女子の職業的訓練」(1862

年4月)では、「働かないこと」を期待されてきた女性が自活を切望した際、「勤勉さというhabitが欠けていればほとんど実現する可能性がないことを痛いほど理解する」のであり、「自己への信頼 (self-reliance) や勤勉さ、実直であることといったhabitを身につけられるような職業的訓練を軽視してきたことが、多くの女性が自分の生き方を肯定的に感じられないこと、すなわち無力な不幸感を生じさせてきた」⁴²⁾とされた。また、論考「現実対理想」では、habitの一つである「自己への信頼」の欠如が、どれほどの障碍となりうるかについて、以下のように論じられた。

女性が若いうちに「自己への信頼」を教えられず、将来の助けとなる教育を受けることができなければ、自分が困ったときに、どうしてうまく対処することができるだろうか。過去をなかつたことにすることはできないし、今までに自分の知性と体を使って物事に取り組まなくてもよいとされてきた女性が、このような作業をすることは困難でつらく、不可能となる場合がほとんどである。学習すると同時に un-learning (解体・構築) をすることは、非常に困難な作業なのである。⁴³⁾

このように、habitの欠如は同誌が女性の職業的自立の鍵とみなす un-learning をも困難にさせるものであるとされた。当時、「たしなみ (accomplishment)」として表現される「ピアノ、ダンス、礼儀作法等、社交上淑女に必要なとされた教養」⁴⁴⁾の獲得を主眼とする女子教育のもとではこのような課題は認識されていなかった。

同誌における女性の学習論は、J・ブシュレットの小冊子『若い女性のための自助のヒント (Hints on Self-Help for Young Women)』(1863年)に集約された。1863年6月号書評欄によると同冊子は、S・スマイルズの『自助論』(1859年)で述べられた「男性の職業的成功を実質的に支えてきた道徳的・知的トレーニングについての議論にかなりの紙幅を割き、そこから女性の職業的成功への何かしらの手がかりを得よう」⁴⁵⁾とするものであり、『自己についての知 (self-knowledge)』に基づいて得られる『自己への信頼』は、女性が自活しようとする際に、空気と同じくらい必要なものである」⁴⁶⁾との主張を展開したとされる。

④ 新しい「女性の職業」の提案

従来、ガヴァネスのみが「女性の職業」と認識されてきたが、これに対して、同誌は多様な「女性の職業」を提案した。それらは、提案方法の違いから次の三つに分けることができる。A) 女性雇用促進協会の開拓事業として取り組まれ、事業報告などを通して提示された職業、B) 「女性の職業」のパイオニア的女性による寄稿などを通して提示された職業、C) 既に女性によって担われていたが周知されてなかったため、実例をもって示された職業、である。

A) 女性雇用促進協会は、女性が就く職種とは考えられなかった印刷業と法律文書複写(事務)において、オフィスを開設するなどして女性を雇用・育成した。同誌では、これらの様子が、同協会年次報告や、女性のための印刷所開業者であるE・フェイスフルの論考「ヴィクトリア印刷所」(1861年9月)や「女性植字工」(1861年10月)などを通して読者に伝えられた⁴⁷⁾。

B) 同誌が新しい「女性の職業」のパイオニア的領域として注目した医療分野については、

女性医師からの寄稿や活動紹介などが掲載された。例えば、アメリカで医学の学位を取得した女性医師 E・ブラックウェルによる「医学の勉強を志す若い女性たちへの手紙」(1860年1月)や論考「女性の専門職としての医学」(1861年5月)などでは、医学への女性医師の貢献可能性とともに、女性医師になるまでの道のりや参考文献などが具体的・実践的に述べられた。

C) 当時、ガヴァネス職が女性にとっての「唯一」の職業であるとの認識に反して、同誌は、女性はずでに様々な職種に従事していることを明らかにした。その職種とは、文筆家、芸術家、俳優業、看護師、講師、移民など多様である⁴⁸⁾。その他、女性高等教育や貧困階層への慈善活動など既に進行中であった女性運動の展開を受けて、今後女性雇用や専門職化が進むと期待される分野として、学校教師、救貧院監督官、工場督官など教育・福祉分野における職業が列挙された⁴⁹⁾。

⑤ 職業女性のための結社(アソシエーション)の提起

「結社(アソシエーション)」とは、18世紀以降のイギリス社会で著しく発達した「個人が自発的に取り結ぶ契約的な関係」⁵⁰⁾から成り立つ組織である。EWJ誌は、慈善活動としての発達経緯をもつ女性運動を、「一過性のものでない」⁵¹⁾より継続的な運動とすることを目指して、男性による協同組合や友愛協会などを手がかりに独自の組織論を展開した。

これらの男性会員を前提とする結社は、実際、働く女性の利害を守るシステムではなく、女性会員の数も少なかった。例えば、友愛協会は、「会員の拠金に基づいて、疾病、死亡、不慮の災害に融資する相互扶助組織」⁵²⁾であったが、育児などで職場を離れることの多い女性は、通例、会員として認められなかった⁵³⁾。当時の協同組合もまた、男性を「稼ぎ手」とする雇用・労働システムの下での生産活動の結果得られる利益の配分に基づくために、女性会員がいたとしても男性会員と同等の特権を享受しないなど、副次的な位置づけにすぎなかったのである。

働く女性が、生産活動から生まれた利潤の共有者として、労働に対する権利を主張しその運営に参画するという協同組合の原理を実践するために、同誌は、利益の「配分」ではなく「生産」の再編成が必要である主張した⁵⁴⁾。そこでは具体例として、「女性のための協同組合」や「お針子のためのインスティテュート」⁵⁵⁾が提案された。これらの組織運営では、女性運動を支えてきた慈善的関心をもった資金援助者は必要であるが、「恩恵を受ける人とそれを受ける人とのつながりは一切、解消されるべき」⁵⁶⁾で、会員が主導権をもつことが重要であるとされた。

このような結社の意義とは、論考「組織」で述べられたように、「女性たちの連携は難しく、活動が社会的重要性をもつ時ですらイニシアティブをとることに慣れていなことで苦勞してきた。女性は従来、問題があるときにどう行動するかを指示される存在であった」が、結社でこそ「女性は、組織で活動することと互いに信頼することを学ぶのであり、これが自己への信頼や自尊心と結びつくと、今まで実現できなかった活動の安定性や力強さを獲得できる」⁵⁷⁾とされた。

3. おわりに — 女性の職業支援の「論理」の意義と限界性

本論では、「女性と職業」を女性解放の中核的テーマに据えた EWJ誌を手がかりに、「ジェンティリティ」からの脱却から自活を必要とする女性の新しい生き方を提起した、女性の職業

支援の「論理」ともいえる言説の一体系を明らかにすることを目的としてきた。

本論での考察から、同誌で展開された「女性と職業」をめぐる議論は、次の五つの特徴的な要素を持つものであったといえる。それは、①女性の生活をめぐる自明視された価値観の un-learning (解体・再構築)、②「女性が働くこと」についての矛盾の可視化と意識変革、③職業女性のための学習論・教育論、④ガヴァネス職以外の「女性の職業」の新たな提案、⑤職業女性のための「結社」の提起、である。これらは、当事者である女性が、人びとの意識に広く内面化された価値規範、既存の社会通念等をいかに解体・再構築しえるか、新しく擁護されるべき女性の生き方とはいかなるものかについて、同誌が提起した思考のプロセスを一つひとつ辿りながら探究することを可能にするものであり、この点で「論理」とみなすことができると考える。同誌は、実践報告よりも議論を主とする雑誌であったが、このように女性自身による課題克服のための糸口を提供しようとしたことから、女性の学習・学習援助についての実践的関心に根差した雑誌であったと結論付けることができる。

さらに、女性の職業支援の「論理」は女性運動家が当時の社会的・文化的文脈のなかで試行錯誤しながら導き出した、「何をもって真の女性解放とするか」という本質的な問いの探究のプロセスを示すものであったと指摘できる。論考「6年間の振り返り」(1864年2月)でパークスが、従来「ばらばらに行われてきた活動が、いまやしっかりとした基盤を成し、今日の主要な社会『運動』の一つとなった⁵⁸⁾」と述べたことから示唆されるように、「論理」はEWJ誌という媒体を通して、女性解放運動が組織的に発展するための「基盤」形成に貢献したものだといえる。

女性の職業支援の「論理」には、これらの意義が指摘できる一方、同誌が展望した女性解放は次のような限界性をもつものであった。同誌は「家庭の天使」論を批判しながらも、家事労働や家政を「女性の本来的な仕事」とし、また勤勉に働く労働者階級女性を賞賛しながら、「慈善」の対象として捉えるなど、女性の労働に対して矛盾する態度を示した。さらに、同誌は女性の自活の手段として「移民」を推奨し、イギリス帝国主義政策に対する女性の貢献を積極的に正当化しようとした。後の女性運動の展開から理解されるように、第一次世界大戦下における女性の労働や貢献は、女性参政権獲得のための根拠として用いられたのであり、同誌の限界性とはイギリス女性運動自体が長期にわたって抱えた限界性でもあったといえるだろう。

とはいえ、女性の職業支援の「論理」は、社会的・文化的諸制約の下で女性の「働くこと」を擁護し、支援の正当性を示す根拠として機能した。それゆえに、この「論理」は、19世紀後半の職業・専門職女性の育成や自己教育運動にも引き継がれたと考えられる。例えば、同誌に寄稿した女性医師E・ブラックウェルらは、女性医師の社会的貢献度の高さを主張しながら女性医師養成運動に乗り出した。また、同誌を中心としたロンドンでの運動から刺激を受け、北部イングランドのガヴァネスなど教育職女性が、1970年代に自らの専門性の向上を目的に「大学拡張運動」の原型である「地方連続講義」を企画・実施し、従来特権的であった大学の知を拓くなどした。

近年では成人教育の意義を専門職教育の文脈で問い直そうとする動向⁵⁹⁾もあり、働く成人男女のための成人教育の理論と実践を構築する必要性は高まってきているといえる。その構築には、働く女性が切り拓いてきた女性の学習及び学習援助についての探究は有効であると考えられる。

イギリス成人教育において学習者として見なされてこなかったこれらの女性を手がかりにしてこそ、現代的課題に応え得る新たな知見が導き出されうるのではないだろうか。

(注)

- 1) 本論で用いる EWJ 誌は、マイクロフィルムコレクション“History of Women”(同志社大学アメリカ研究所蔵)に1863年8月号まで収録されている。同コレクションに収録されていないものの一部は、Candida Ann Lacey (ed.), *Barbara Leigh Smith Bodichon and the Langham Place Group* (1986) にリプリントとして掲載されている。脚注では、マイクロフィルムコレクションからのものには EWJ と記し、Lacey 編のリプリントのものは、Repr. EWJ と表記する。
- 2) Beetham, M & Boardman K. (ed.), *Victorian Women's Magazine*, Manchester University Press, 2001, p.61 参照
- 3) 川北稔編『新版世界各国史 11 イギリス史』(山川出版社 2006年、p.300)では職種の多岐化をふまえた「19世紀後半のイギリス社会の構成」が図式的に示されている。
- 4) 村岡健次他編著『ジェントルマン：その周辺と近代』ミネルヴァ書房1997年、p.236
- 5) 秋元麻美『辺縁としてのガヴァネス—リスベクタビリティからの脱却』河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店 2006年 p.53
- 6) R・ストレイチー『イギリス女性運動史』来栖美智子・出淵敬子監訳 みすず書房 2009年
- 7) 河村貞枝「『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌の一考察」『イギリス近代フェミニズム運動の歴史像』明石書店 2001年
- 8) 柴原真知子「19世紀イギリスにおける成人教育活動としての女性の職業支援—女性雇用促進協会の実践的取り組みから」『京都大学大学院教育学研究科紀要』、第56号、2010年、pp.1-14
- 9) 村松孝徳『障害者運動は法を変える：民法第11条改正要求の論理』(たいまつ社 1979年)、佐藤忠男『学習権の論理』(平凡社 1973年)、星野芳郎『反公害の論理』(勁草書房 1975年)など。
- 10) 柴原真知子「イギリス成人教育史研究における労働者階級と女性の位置」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』第7号2008年、pp.107-122
- 11) J・パーヴィス『ヴィクトリア時代の女性と教育：社会階級とジェンダー』香川せつ子訳 ミネルヴァ書房 1999年 p.83
- 12) 例えば、ガヴァネスの周縁性を描いた絵画「気の毒な先生」(R・レッドグレイブ作)など。
- 13) この女性たちには、女性高等教育運動のE・デイヴィス(Emily Davies)、「最初的女性医師」とされるE・ブラックウェル(Elizabeth Blackwell)、女性医師養成運動に関わったE・G・アンダーソン(Elizabeth G. Anderson)、ヴィクトリア印刷所経営者のE・フェイソフル(Emily Faithful)、女性雇用事業と移民事業を行ったM・レイ(Maria Rye)などがおり、看護師養成を推進したF・ナイティンゲール(Florence Nightingale)や救貧院活動のL・トワイニング(Louisa Twining)などともつながりをもっていた。
- 14) 河村貞枝「『イングリッシュウーマンズ・レビュー』誌の一考察」河村、前掲書、p.60
- 15) Lacey, C. A., *Barbara Leigh Smith Bodichon and the Langham Place Group*, Routledge & Kegan Paul, 1986, pp.4-5
- 16) *ibid.*, p.1
- 17) この振興協会は法律、刑制度、教育、公衆衛生、社会経済の改革に関心をもった政治団体として1857年から1884年まで存続した。
- 18) Rendall, J., 'A Moral Engine': Feminism, liberalism and the English Woman's Journal,' *Equal or Different: Women's politics 1800-1914*, Rendall, J. (ed.), 1987, pp.112-38
- 19) 'The Profession of the Teacher: The Annual Reports of the Governesses' Benevolent Institution, from 1843-1856,' *EWJ*, March 1858, Vol.1 No.1
- 20) 'On the Adoption of Professional Life by Women,' *EWJ*, September 1858, Vol.2, No.7, p.8

- 21) *ibid.*, p.10
- 22) 'What can Educated Women Do ? (II),' Repr., *EWJ*, Jan. 1860, p.164
- 23) 例えば、'A Question: Are men naturally cleverer than women?,' *EWJ*, January 1859, Vol.2 No.11; Parkes, 'The Market for Educated Female Labour,' Repr., *EWJ*, Nov. 1859; 'The Disputed Question,' *EWJ*, August 1858, Vol.1 No.6 など
- 24) E. Faithful, 'Victoria Press,' Repr., *EWJ*, Oct. 1860
- 25) Parkes, B. R., 'The Balance of Public Opinion in Regard to Woman's Work,' Repr., *EWJ*, July 1862, p.203
- 26) Parkes, 'A Year's Experience in Woman's Work,' Repr., *EWJ*, Oct. 1860, Vol.6 No.32, p.115
- 27) A. L. 'Some of the Work in which Women are Deficient,' *EWJ*, May 1858, Vol.3 No.15, p.190
- 28) *ibid.*
- 29) 'The Governess Question,' *EWJ*, Nov. 1859, Vol.4 No.21, p.163
- 30) 'Who's to Blame?,' *EWJ*, June 1863, Vol.11 No. 64, p.219
- 31) *ibid.*, p.220
- 32) 'The Profession of the Teacher,' *op. cit.* p.8
- 33) 'The Governess Question,' *op. cit.* p.166
- 34) *ibid.*, p.163
- 35) 'Some of the Work in which Women are Deficient,' *op. cit.* p.190
- 36) 'Who's to Blame?,' *op. cit.*, p.217
- 37) 'Facts Versus Ideas,' *EWJ*, April 1861, Vol.7 No.38, A. R. L., p.77
- 38) 河村、前掲書
- 39) 'Facts Versus Ideas,' *op. cit.*, pp.76-7
- 40) 'Modern Inconsistency,' *EWJ*, January 1862, Vol.8 No.47, p.312
- 41) 他の論考でみられる habits の具体例には例えば、判断力や省察する力、自尊心などがある。
- 42) 'Training of Girls; or, the Vexed Problem,' *EWJ*, April 1862, Vol.9 No.50, p.107, 109
- 43) 'Facts versus Ideas,' *op. cit.*, p.78
- 44) パーヴィス、前掲書 p.83
- 45) 'Notices of Books: "Hints on Self-Help for Young Women," By Jessie Boucherett,' *EWJ*, June 1863, Vol.11 No.64, p.276
- 46) *ibid.*
- 47) Faithful, E., 'Victoria Press,' *op. cit.*; 'Women Compositors', *EWJ*, Sep. 1861, Vol.8 No.43 : これらの論考では雇用された女性の出身地や印刷所での経験、既存の印刷組合からの反対行動や、労働環境改善の取り組みなどについても述べられた。
- 48) 'On the Adoption of Professional Life by Women,' *op. cit.*
- 49) 'What can Educated Women Do? (I),' *op. cit.*
- 50) 浜林正夫『イギリス労働運動史』学習の友社 2009年 p.42
- 51) A. R. L. 'Organization,' *EWJ*, Jan. 1861, Vol.6 No.35, p.334
- 52) 川北稔『イギリス史』山川出版社、1996年、p.303
- 53) 'Friendly Societies,' *EWJ*, Oct. 1860, Vol.6 No.32, p.112
- 54) 'Women and Co-operation,' *EWJ*, Feb., 1864, Vol.12 No.72
- 55) L. N. 'Institution for the Employment of Needlewomen,' *EWJ*, June 1860 Vol.5 No.28
- 56) 'Women and Co-operation,' *op. cit.*, p.375
- 57) 'Organization,' *op. cit.*, p.337
- 58) Parkes, B. R., 'A Review of the Last Six Years,' *EWJ*, Repr., Feb. 1864, Vol.13 No.74, p.215
- 59) 柴原真知子「専門職教育における Work-based Learning 概念導入の意義と可能性—ロンドン大学教育研究所医療者修士課程の取り組みから」『日本学習社会学会年報』、第6号、2010年、pp.88-91

(生涯教育学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2010年9月6日、改稿2010年11月26日、受理2010年12月9日)

‘Logic’ for Victorian Women’s Occupational Independence
: Process of “un-learning” in the Discourse of
English Woman’s Journal (1858-1864)

SHIBAHARA Machiko

The purpose of this paper is to examine the discourse on women and work that was developed in *English Woman’s Journal* (*EWJ*), an early English feminism magazine, published from 1858 to 1864. This paper argues that *EWJ* tried to develop practical strategies for legitimising the necessity of women’s occupational independence and supporting it, by demonstrating logically the process of “un-learning” the value of gentility, which was widely accepted in the Victorian society and was to praise idle women at home, not engaging in any paid employment. The discourse of *EWJ* was based on the observations on the lives of the lower middle-class women, who desperately needed livelihood despite their social position. From the analysis of the articles of *EWJ*, the paper identifies the following five components in the discourse and examines them as “logic”. These are 1. “Un-learning (= decomposing and reconstructing)” the gentility, 2. Revealing inconsistency in general understanding on “women” and “work,” 3. Developing new learning and education for women who are or will be engaged in occupations/professions, 4. Proposing new occupations/professions for women, 5. Proposing the establishment of associations for working/professional women. By examining these as “logic,” it is indicated how early feminists related women and work to the emancipation of women as human beings, and how they tried to develop the new possibility for women’s independence through work.